京都市立美術工芸高等学校
卒業生インタビュー

平成 31年卒業
川島織物セルコン

木村 華子

「「好き」を徹底的に追求すれば
必ずやりたいことにたどり着ける」

美工で培った観察力とものの見方

美術工芸高等学校では、デッサンを通じて「対象をじっくり観察し、その本質を捉えること」を学びました。この観察力、見る目は現在の仕事で糸を選んだり、デザインの細部まで意識して糸を作る上での、基礎となっています。

また、技術だけでなく、同じ志をもつ友人たちと美術について語り合った時間も今の私を支えています。お互いの作品を見合い、考え方をぶつけ合った経験が物事を多角的に見る力を養ってくれたと感じています。

「織り」の世界への歩み

高校卒業後、「織り」を深く学びたいという思いから川島テキスタイルスクールに入学しました。

1年目に織りの基礎を習得した後、2年目からはファッションテキスタイルを専攻し、主に服地の制作に没頭しました。3 年目には学内での制作だけでなく学外活動にも参加しました。

実際の現場で活動されている職人の方々とコラボレーションし、自らデザインした柄を形（服地）にしていただくという経験を通じて、仕事として「モノづくり」に向き合う職人の姿勢を、肌で学びました。

修了後、進路を考える際に幼い頃から抱いていた伝統的な仕事への憧れが指針となりました。川島織物セルコンを見学させていただいた際、真摯に業務に励む先輩方の姿に深く感動し、古き良き伝統を継承しながら、常に新しい挑戦を続ける姿勢に強く感銘を受け、入社を決意しました。

仕事の中で見えてきたものづくりの意味

現在、川島織物セルコンにて緞帳の配色業務を担当しています。緞帳の配色は、基本となる 6 本の糸を撚り合わせ原画の色調を再現する工程です。単に色を合わせるだけでなく、織りあがった際の色の流れや全体のバランスを考え、忠実に表現できるよう先輩方に教わりながら日々技術を磨くことに取り組んでいます。

また、配色において大切だと感じているのがお客様やデザイナーとの対話です。素材やこだわりを汲み取れるよう密なコミュニケーションを欠かさず、共有したイメージを糸に落とし込めるよう意識しています。

学生時代は、個人の創作活動として自分自身の感性や表現を掘り下げることを重視してきました。現在は、仕事を通じ、一人では到達できない「チームによるモノづくり」の重みと責任を日々学びながら感じています。

デザインから織りに至るまで、各工程のバトンを繋いでいくことが大事な配色の仕事では、工程間の細かなコミュニケーションが不可欠です。チーム全員の力で作り上げた緞帳が完成した瞬間の達成感は、個人制作では味わえなかった大きな感動であり、配色担当として誇りを感じられる瞬間だと感じます。

「好き」をという気持ちを大切に育てて

私は小さい頃から手を動かして何かを作ったり、絵を描くことが好きでした。「美術工芸高等学校」という存在を知ったのは小学６年生の時でした。当時通っていたアトリエの先輩が、美術工芸高等学校に進学したことがきっかけです。

中学生になり実際に高校見学へ行くと、好きなことに熱中し、夢中になって制作に打ち込む先輩方の姿を見ました。自分の好きを隠さず全力で好きなことを続けられる環境に私は強く惹かれました。

私はこれまで好きなことしかやってきませんでした。少し偏った意見かもしれませんが、「好き」を徹底的に追求していけば、必ず自分のやりたいことにたどり着けるのではないかと思います。「これが好き」「これをやっていたら夢中になれる」という気持ちがあれば、その気持ちを大切に育ててほしいです。